

1. その翌日、祭りに来ていた大ぜいの人の群れは、イエスがエルサレムに来ようとしておられると聞いて、しゅろの木の枝を取って、出迎えのために出て行った。そして大声で叫んだ。「ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。イスラエルの王に。」(12:12-13)
 - a. 過越の祭りが近づいていたのでユダヤ人たちがエルサレムに上っていた（他の2つの祭りはペンテコステと仮庵の祭り）。エルサレムは群衆でごった返していた。
 - b. 人々がしゅろの木の枝を持ってイエスを出迎えたのは、神の勝利、あるいは王をたたえる象徴である。黙示録7:9では「天の人々」がしゅろの木の枝を持って神をたたえている。ただし興味深いことに、しゅろの木の枝を振りかざすのは過越の祭りではなく仮庵の祭りの習慣である。人々はイエスのエルサレム入城をイエスの犠牲への道とは理解せず、戴冠式のようにとらえていたのかもしれない。
 - c. 群衆はイエスの意図は理解していなかったが、少なくとも彼が救い主であること（「ホサナ」とは「救ってください！」の意味）、そして彼が主であり王であることはわかっていた。

2. イエスは、ろばの子を見つけて、それに乗られた。それは次のように書かれているとおりであった。「恐れるな。シオンの娘。見よ。あなたの王が来られる。ろばの子に乗って。」初め、弟子たちにはこれらのことがわからなかった。しかし、イエスが栄光を受けられてから、これらのことがイエスについて書かれたことであって、人々がそのとおりにイエスに対して行ったことを、彼らは思い出した。(12:14-16)
 - a. イエスがろばに乗って入城されたのはゼカリヤ書9:9の成就。「シオンの娘よ。大いに喜べ。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方は正しい方で、救いを賜り、柔和で、ろばに乗られる。それも、雌ろばの子の子ろばに。」
 - b. 聖書に通じてメシヤを求めていた人ならこれらが理解できたはずであるが、弟子たちでさえもそれを理解したのはイエスが栄光を受けられてからだと記されている。
 - c. イエスの再臨について聖書は何と知っているか、またそのしるしを見分けられるだろうか？イエスの再臨は初臨と同じように預言されており重要である。聖書には、主の日は盗人のように来るが驚いてはいけない、と書かれている(1テサロニケ5:1-4)。

3. イエスがラザロを墓から呼び出し、死人の中からよみがえらせたときにイエスといっしょにいた大ぜいの人々は、そのことのあかしをした。そのために群衆もイエスを出迎えた。イエスがこのしるしを行われたことを聞いたからである。そこで、パリサイ人たちは互いに言った。「どうしたのだ。何一つうまくいっていない。見なさい。世はあげてあの人のあとについて行ってしまった。」(12:17-19)
 - a. ヨハネは大ぜいの人々がイエスが行ったしるしをあかししたのでそれを聞いた人々もイエスを礼拝したと記している。
 - b. 今の時代に生きる私たちにも1世紀のクリスチャンと同じ責任がある。しるしをあかしすること。しるしは様々な形をとる場合がある（過去のしるし、神のみ言葉の成就、現在のしるし）。そして「しるし」を理解するうえで大切なのはそれをあかしすることである。
 - c. 法廷では信用できる証人が重要な役割を果たすが、神の御わざの確かな証人になることはさらに重要である。私たちがあかしをする時には私たちの人格が左右する。下心がある人、何かをたくらんでいる人、人格が備わっていない人・・・そのような人格はイエスの福音をあかしする時に不利に働いてしまう。

4. さて、祭りのとき礼拝のために上って来た人々の中に、ギリシヤ人が幾人かいた。この人たちがガリラヤのベツサイダの人であるピリポのところに来て、「先生。イエスにお目にかかりたいのですが」と言って頼んだ。ピリポは行ってアンデレに話し、アンデレとピリポとは行って、イエスに話した。すると、イエスは彼らに答えて言われた。「人の子が栄光を受けるその時が来ました。」(12:20-23)
 - a. ギリシヤ人（異邦人）たちがご自分のもとに来た時、イエスは明確に死の時が来たことを認識された。
 - b. 聖書の著者たちの時代以来、私たちは「終わりの日」に生きている。しかし時はまだ来ていない。イエスの再臨の時にも人の子が栄光を受ける時のしるしが何であるかを知ることが大切になる。